

【富士山が教えてくれた一滴の重み】

光英 V E R I T A S 中学校 二年 大坂 樹名

「水」。私にとってこの言葉は、飲み水やお風呂、トイレなど、毎日の生活の中で当たり前にあるものだった。蛇口をひねればすぐに安全な水を使える便利さを、私はこれまで深く考えたことがなかった。

そんな私の水への意識を大きく変えたのが、小学校五年生の夏に経験した、富士登山だ。二泊三日で富士山の山頂まで登って下山するという、当時の私にとっても過酷な体験だったが、その中でも特に印象に残ったのは、水がほとんど使えない環境だったことだ。

トイレは基本的に有料で、出る水も限られていた。手洗い場の蛇口をひねっても、ほんの少し水が出るだけで、山頂付近では手を洗える場所すらない。もちろんお風呂に入ることもできなかった。そしてさらに驚いたのは、山小屋で売られていた五〇〇ミリリットルの飲料水が五百円もしたことだ。普段では何気なく使っていた水が、そこではとても貴重なものに感じられた。私は家から持って行った水をできるだけ無駄にしないように少しずつ飲んだり、歯磨きに使う量を減らしたりしながら過ごした。その時私は、水が自由に使えないだけで、生活がここまで不便になるのだということを身をもって実感した。それと同時に、普段どれだけ多くの水を何も考えずに使っていたのかにも気付かされた。今まで水に困ることのない生活が当たり前だったからこそ、そのありがたさを感じる機会がなかったのだと思う。富士山での体験が教えてくれたのは、水は生活を支える大切な存在であり、使えること自体が幸せだということだ。

富士山から帰ってきてから、私は日常でも水の使い方を意識するようになった。歯磨きや洗顔の時に水を出しっぱなしにしない、シャワーを定期的に止める、トイレを二回以上流さない。どれも小さなことではあるが、富士山での経験を思い出すと、自然と行動も変化するようになった。

この経験は、災害が起きたときの断水時の生活にもつながるはずだ。もし地震や台風などで突然水が止まれば、お風呂やトイレ、食事など、普段当たり前にできていることができなくなってしまう。

水は生命の維持に欠かせないものであり、生活の基盤となるものだ。日本では、水道水をそのまま飲むことができ、高い安全性が保たれている。だが、それは決して当たり前のことではない。調べてみると、世界で水道水をそのまま飲むことができる国は、日本を含めて十カ国ほどしかないことが分かった。また、世界の人口のおよそ四分の一が安全な水を利用できておらず、そうした人々は整備されていない水源から直接水を汲んで生活している。このような現状を知り、日本で毎日使っている水が、世界的に見ればそれほど贅沢なものであるかを改めて実感した。

しかしこのような環境は、自然の恵みだけでなく、全国どこへでも水を届けるための設備が整い、それを維持するための多くの人の努力によって成り立っている。だから私は、安全な水があることを当然だと思わず、支えている人々の気持ちも無駄にしないようにしていきたい。そして、この幸せに失ってから初めて気付くのではなく、恵まれた環境にある私たちだからこそ、今一度水の大切さについて真剣に考え、多くの人が行動に移していくことが必要なのだと思う。

これから先、いつ災害が起こるかは分からない。災害が起これば、水がないと生命の維持だけでなく衛生面でも多くの困難が伴う。だからこそ私は、富士山での経験を活かし、限られた資源の中でどのように使うかを考える習慣を身につけていきたい。そして、それを行動に移し、実践し続けていこうと思う。こうした一人ひとりの行動の積み重ねが、今後の暮らしのあり方を変えていくと信じて。